現代日本小說大系

55

昭和十

日本近代文學研究會編集

現代日本小說大系

第五十五卷

河出書房版

現代日本小說大系　第五十五卷

昭和二十七年七月十日　初版印刷　定價　貳百參拾圓
昭和二十七年七月十五日　初版發行　地方定價　貳百四拾圓

著代表者　壺井榮

發行者　東京都千代田區神田小川町三丁目八番地　河出孝雄

編集者　東京都千代田區神田小川町三丁目八番地　日本近代文學研究會　中野重治

印刷者　東京都文京區戸崎町七一番地　小泉輝章

發行所　東京都千代田區神田小川町三ノ八　株式會社　河出書房　電話神田(25)三四七四番　三二七四番

小泉印刷株式會社・印刷

目次

宮本百合子
廣場……五
佐多稲子
くれなゐ……三
壺井榮
暦……九七
大谷藤子
須崎屋……一四五

鶴田知也
コシャマイン記……一六三
本庄陸男
白い壁……一八五
福田清人
脱出……二〇七
平林彪吾
月のある庭……二二九
荒木巍
自殺未遂……二五一

试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

森山啓
遠方の人……二七一
和田傳
村の次男……二九五
岩倉政治
稲熱病……三一三
解説（中野重治）……三四三

宮本百合子

廣

場

一

大階段を降り切つた右手のちよつとくぼんだやうなところで預けてあつた書附をかへして貰ふと、更に六つ七つの段々からウラル大理石を張つた廣間へぬけ、大きい重いガラス扉を體で押して外へ出た。

暖い冬の匂ひのするトゥウェルフスカヤ通りの雜沓が、朝子の目立たないその姿を忽ち活氣の溢れた早い自身の流れの裡へ卷きこんだ。日光はあたたかく眞上から市街を照らし、建物の錆びた赤や黃色の外壁をぬくめてゐるが、ふと行きずりの通行人の外套からは、もう何處かに消えない霜があることを知らせる匂ひ、懷しい毛皮の匂ひなどが輕く空氣の中に漂つてゐる。

手套をはめた片手は深くポケットへつつこみ、片方の手で質素な茶色外套のカラアのところを引きつけるやうに抑へてベレーをかぶつた顏をうつむけたまま、朝子は暫く機械的に歩いた。

プーシュキンの立像のある並木路の切れめまで來て、そこの廣さが朝子を我にかへらした。

朝子はうつむいてゐた顏を初めて擡げ、一遍みたものをもう一度見直すといふやうな眼差しで、歩道に籠をもつて並んでゐる向日葵の種賣りや林檎賣り、色紙細工の花傘の玩具を賣つてゐる黑い服の繻足した支那婦人などをながめた。どうしても外套を引きつけずにはゐられないやうな感動はまだ去つてゐず、電車をやりすごす間さうやつて立ち止つてそんなものを見てゐる自分の顏つきに動顚のあらはれてゐることを、朝子ははつきり感じるのであつた。

この都會に自分がのこつて暮せる。そんな可能を思つてみたことがあつただらうか。西ヨーロッパを旅行して來てからは一層新鮮な理解と愛着とを感じて、いはば胸元をおしひろげて日夜採まれてゐるこの人波の中に、本當にその群集の一人としてとけこむこともできるのだといふやうなことを、考へたことがあつただらうか。それが、今突然、實にたやすい、むしろ當然なことのうつりゆきのやうにして、朝子の前に示されたのであつた。朝子と友達の素子とが、この年のうちには故郷へ向つて出發するときまつてゐる今。——

いくらかくつろぎながら、しかし、ひとりでにまたうつむいてしまふ思ひにとられて、朝子は、自分たちの住んでゐるホテルへの角を曲つた。階段の中途で、絨氈掃除をしてゐた掃除女のカーチャが道をあけると、何とも云へない底に輝きのこもつたやうな優しい、同時に心はうつろのやうな微笑を與へて、朝子は廊下の奥にある室のドアをあけた。

「ただいま」

左手の窓に向つて机についてゐる素子は、あつちを向いたなり、それにこたへる聲を出した。朝子はのろのろした動作でベレーをぬいで入口の帽子かけにかけ、外套をぬいで同じところへかけ、自分のベッドの傍へ行つてそこへ腰をおろした。部屋は劇合ひろくて、さつぱりした薄青い壁の上やあつち向きの素子の兩肩のあたりに、二重窓からの少し澱んだ明るみがをどつてゐる。一つの高い木棚を仕切りにして、朝子

の机は右の窓のところにあるのであつた。
「どうした！」
「ふうむ」
「あたんだろ！」
「あたわ」
ペンの速さをまして最後の行を書き終る素子が、はなれてゐる朝子のところから見えた。
「――どうしたのさ」
やがて椅子の上で、くるりとこつちを向いた素子の畫形の顏の上に、急に擴がつてゆく驚駭の表情を見ると、朝子はとりも直さずそこに自分の動亂が映つてゐるやうで何とも云へない苦しい氣がした。けれども自分の顏つきをかへる力は、今の朝子にないのであつた。
「どうしたのさ」
どうといふところに特別力をこめて云ひながら、素子は何か警戒するやうに、離れてゐる二人の間にある距離の助けで何かをそこからさぐり出さうとでもするやうに、凝つとその場を動かず、部屋の中を往つたり來たりしはじめた朝子を見守つた。
やや暫くして、素子が一種の皮肉を帶びた聲で、
「何か云はれてでも來たんだらう」
と云つた。素子も、けふ朝子が訪問した老人は知つてをり、けふ朝子がそこへ行つたことも知つてゐるのであつた。朝子は默つたまま暗く複雜な光をもつて注がれてゐる素子の眼の中を眞直に見た。素子は、
「どうせそんなことだらうと思つた！」
そして煙草に火をつけて、長く烟をふきながら上の方を見てゐたが、
「のこれつて云つたんだろ」
いくらかやさしく訊いた。朝子はうなづいた。
「そりや、あなたにはさう云ふさ」
その語調には深く傷けられた素子の氣持と自嘲とが響いた。
「そりやあなたには云ふさ、私には云はないよ。さうだらう？」
ハ、ハ、ハ、と苦しさうに區切つて顏を仰向けながら素子は甲高く不自然に哄笑した。そして、笑つたので溜つた涙を拭くといふ風に眼鏡を手の甲でもちあげて眼をこすつた。朝子は自分の心の動搖とともにさういふ形であらはれる素子の混亂も見てゐられない氣がした。幾分子供らしい恐怖の浮んだ表情になつて朝子は熱心に、
「でもその話は、作家としてのことなのよ、さういふ範圍でのことなのよ」
と云つた。
「どつちだつて同じことさ」
そして再び机の方へ向き直りながら、
「どうでもあなたの考へる通りにすればいいが、私は、あなたのおつ母さんたちに妙な云ひわけ役をさせられることだけは眞平御免だからね。それだけは前もつておことわりだから。歸らないんなら歸らないでいいから、はつきり手紙でも

何でも書いといてもらはう」

ここで暮した三年を入れれば、朝子たちは六年ほど一緒に暮して來た。その年月のなかで二人の女はどつかで少しづつ少しづつちがつたものになつて來て、今さけがたい一つの岐點にぶつかつた。そのぶつかり工合にも、何かめいめいの角度といふやうなものがあらそへない形で現れてゐることが痛切に感じられるのであつた。

癌臺の枕の上へ横になつた顏を押しつけて考へこんでゐるうちについとろりとした朝子は、やがて、

「御飯までにケラシン（炊事用石油）買つて來とかなけりや駄目なんだらう」

と云つてゐる素子のそつけない聲で、びつくりして起きなほつた。素子は、わざとこつちに背を向けたまま、自分の聲の素つ氣なさを意識してゐる調子で云つてゐるのであつた。

朝子は默つて立ち上つて靴をはきかへ、衣裳戸棚をあけて太い麻糸でこしらへた買物袋をとり出した。その大きい衣裳簞笥の左側の小さい棚が、このホテル暮しの彼女たちの食器棚になつてゐるのであつた。歸る時が目前に見えてから素子は焦立たしいやうな執着で朝から晩まで机と本にとりついてゐて、日々のそんな用は朝子のうけもちのやうになつた。

「ぢや行つて來る、ほかに用ない？」

「私はないよ」

ホテルを出ると、朝子はさつき來たとは反對の方角へ急ぎもせずに歩いて行つた。裏通りになるその邊の車道は古風な石敷道で、永い歳月のうちに踏みへらされた敷石のどれもがいろんな不規則な形に角を磨滅されてゐる。そのごろごろした石と石とのすき間はひろく深くて歩き難く、冬日のなかに何處となし馬糞のにほひが漂つた。重い蹄鐵をうつた荷車が車輪をその石敷道の上ではね上らせながら通つて行くと、元氣よく石をうつ蹄の音や車輪の音が灰色つぽい建物に反響して、再び下を歩いてゐる朝子のところまでかへつて來る。何かの塀で行き止りになつた小路の左側に石油販賣所があつて、もうそこの歩道には二十人ばかりの列ができてゐる。朝子はその列の尻尾についた。油じみた販賣所の鐵扉は開いてゐて、縣前垂の男の姿がチラついてゐるが、まだ賣り出してはゐない。日本の雀よりすこし羽色が黑つぽいやうなこの都會名物の雀たちが、日向にころがされてあるドラム罐の上から、チュと囀つて飛び立つたり、また戻つて來たりして遊んでゐる。その有樣を眺めて、朝子は列の動き出すのを待つた。素子と二人分の切符で瓶が二本買へた。

それからパン屋へ行つて、ここでも列について一日分のパンを買つた。朝子は夜のお茶にたべるものがなかつたことを思ひ出した、街角三つばかり先の食糧店の半地下室へ下りて行つた。

入口近くにいくつも並んだ胡瓜漬の大樽、鮮やかな朱だの水色だの不思議な色をした鹽漬キノコの桶。そんなものから立つ匂ひは林檎だの、奥の方にどつさりつるしてある燻製魚だのの匂ひと混りあつて獨特の親しみある匂ひで天井の低い店ぢゆうを充してゐるのであつた。朝子は買物袋をぶら下げ

ながら、あちこち見てまはつた。そして、手間どつてイクラだの酸つぱくした牛乳だの小魚の燻製だのを買つた。紅茶と石鹸がけふ入荷したばかりで、それをめあてに押しかけた人で、勘定場の列は全くのろのろと動いてゐるのであつた。靴の底を擦つて皆が一歩一歩動いてゐる石張床は、今に雪が降るやうになると辷つてころばないために、入口の段々のところからずつと大鋸屑からは鼻のつんとするやうな匂ひが立ちのぼつて、午後の三時ごろからもう電燈の煌いてゐる店内に、何とも云へず陽氣な雰圍氣をふりまくのである。

朝子は、三年前の雪の晩のことを思ひ出した。シベリア鐵道から停車場についたばかりの素子と二人が、馬車にゆられながら、幌から首をさしのぞけるやうにしてどんな感動で降る雪の間に燦めいてゐる商店の窓々やその上の方に暗く消えこんでゐる夜空を眺めたことだつたらう。それから何度この食糧店へも來たか數しれないわけだが、思へば、かういふ平凡さうな日々の營みの中から今日までに自分が獲て來てゐるものを考へると、朝子は新しい感動を覺えた。今歸國をひかへて自分たちが當面してゐる問題にしろ、それに對する自分たち二人の心理のそれぞれのちがひにしろ、心づかない間につみ重ねられて來てゐるその原因をつきつめてみれば、朝子にはやつぱりこの食料店の北國風の匂ひも切りはなせないものとして考へられるのであつた。

素子は專門のこの國の文學研究のために來た。小說をかく朝子はアンナ・カレーニナなどといふ小說でごく身近に感じられてゐる色彩の多い古い國、しかもそれが見ず知らずの新しいものになりかかつてゐるといふ國、遠いところからの賞讃と誹謗とで渦卷いた中に遙に見える國の生活に好奇心を抱いて來た。素子も朝子も初めのうちは、同じやうに、それぞれの程度で語學の勉强をはじめたりしたが、暫くすると、一部屋住居の彼女たちの暮しに、同じ時刻の別な暮しかたが始つた。素子のところへ敎師が來ると彼女は朝子にその部屋を出るやうに云つた。廊下にゐることはできにくかつたから、朝子はその都の案內書をたよつて、いろんな場所いろんな人の集るところへ出かけた。二人の書類について面倒くさいかけ合ひ、本屋で素子の必要な或る本をさがし、なければ注文する用事、それから日用品のこまごました買ひ出し、さういふことが素子の机に向つてゐる時間、朝子の生活をみたすやうになつた。そして何と面白いものだらう。この古くて全く新しい國が一九二〇年代の終りから三〇年にかけて經驗した二十四時間は、食物でも紙でも衣類でもひどく品不足で、キャベジの四分の一塊りのために朝子はたくさんの道のりを歩き、長く列につき、なほあの五つの大キャベジも自分の一人前のところでなくなりはしないだらうかとはらはらした。バタやチーズがなくなつた。それは農民が牛を殺してしまつたからだといふけれど、なぜ牛は殺されるのだらう。朝子は自分たちの生活の朝から夜につづくあらゆるさういふ現象の意味を知りたくて讀書した。

素子は何册も古典や現代の詩を敎師とよんだ。詩韻の解剖をやつた。專門の勉學は進んだし、夏や秋の大きい旅行は素

子のプランにしたがつてやられ、同じやうに世界の古い背骨といはれる大山脈やテレクの川風に吹かれたのだが、朝子が街の喧囂の裡で群集の感情にふれ、自分の感情をも吟味し、こんな不如意をどうしてこんな元氣でしのげるかといふ一般的なおどろきから、やがてその理解に入つて行く鹽梅とは、どこやらちがふものがあつた。そんな違ひも互ひに認めあつてゐて、諧謔の種ともなつて來たのであつたが、今、突然朝子にだけそこでの生活を一層承認し保證する意味をもつ居のこりの可能が示されたことは、朝子自身に充奮なしで感じられないとほり、素子には何か自分だけ三年の果に本の荷箱と一緒に荷つて放り出されたやうな、沮喪させられる切なさであることもわかるのである。素子がひとりかへるとすれば、それは文字どほりのひとりで、生活においても、心においても、朝子とはちがふものとして、朝子を承認したものに承認されなかつたものとしての自分を自分に納得させなければならない。しかしそれは素子にとつてどんな苦痛だらう。その苦痛が、情愛の問題より深刻に二人の人間としての精神に切りかかつて來てゐるものであることが、さつき重い扉を押してトゥウェルフスカヤの通りへ出た時から朝子には犇と感じられてゐるのである。うつかり考へこんでゐるので、朝子は自分がもう勘定場の前まで來てゐたのに氣がつかず、黑い布で頭を包んだうしろの年とつた女から、

「どうしなさつたね。財布でもおつことしたのかね」

と注意された。

二

朝子の氣持は素子にもよくわかつてゐると思へた。朝子はつまりは自分で決心するとほりに行動するだらう。これまでずつと、そして生きて來たとほり。だが、その決心はまだ心の中にきまらずにゐる何かの理由でかためられてゐないのだ、と。さういふ自分の心持が、素子にありのままうつつてゐることを朝子もまた十分知つてゐた。二人は、翌日になつてもどつちもその問題にふれなかつた。けれども、薄靑い壁にかこまれた部屋の空氣にはこれまで二人のゐる處になかつた一種の緊張した、神經質な空氣が漂ひはじめた。だいたいに口數が少くなり、笑ふこともなくなつた一日の中で、素子は頑固に机に向つてゐるが、神經の端々はいつも水色のジャムパアを着た朝子のまはりに動いてゐて、その心のうつり行きをうかがつてゐるやうな雰圍氣である。

部屋の眞中に立つてゐる本棚の仕切りの右の窓べりで、朝子はひつそりとして勉强してゐた。窓じきゐには、酸化牛乳(アシドクリシヤ)のコップが世帶じみた光景をかもし出しながらのつてゐる。朝子は辭書を絕間なくひつくりかへしながら飜譯をしてゐるのであつた。歷史で有名な或る婦人の傳記で、特別文學的に書かれてゐるのでもなかつたから難解ではなかつたが、慣用語で朝子の知らないのが少くなかつた。朝子のつかつてゐる字引にはさういふ細かいところまで出てゐないのであつた。紙きれにそんなのを幾つか書きつけた。そして仕切りのむかふから煙草の煙が流れてゐるとき、それを素子にききに行つた。

「ちよつと、これ何といふことになるのかしら……」
素子はこれまでの二人の生活の習慣から何といふことなし默つて、朝子が目の前に出してある紙きれの上にかかれてゐる下手な字を讀んでゐたが、讀み終ると急にこみ上げる激しい感情に喉をせかれたやうな聲で、
「自分にやれると思つたので引受けたんだらうから、ひとりでやつたらいいだらう」
突つぱなして云つた。そんな仕事を朝子が熱心にやつてゐることも今の素子には腹立たしい刺戟である。それがあらはに示された。これも、今おこつてゐる問題と連關をもつてゐた。朝子としては、仕事そのものより、自分の誠意の問題として大事に考へる種類のことなのであつた。
突つぱねられて、朝子は悲しい顏をした。さういふ態度で素子が自分の個性にだけ立てこもつて二人の距離をひらいてゆくやうなのが、朝子にはこはくてまた悲しいのであつた。それなり暫く朝子は傍に佇んでゐたが、やがて自分の机へ引かへした。到頭、そんなことを云はないで、といふ言葉が朝子の口を出得なかつた。今度の問題は、素子がそれほど恣意的に振舞ふはずのものだらうか。さういふ素子を隔たつた眼で眺める心が、朝子のうちにもかき立てられた。
窓の外に視線をやつて頰杖をついてゐたら、顏をこつち迄現はさないで、素子が新版の大きい辭典を机のはじへ突き出してよこした。
「それを見れば大抵のものはある——」
朝子は無言でしづかにそれを自分のよこへ置き直した。

自分の心のうちの動搖を整理してゆく手がかりにも思へて、朝子は一心に誰の助けもかりずその仕事をつづけてゐるのであつた。
その間にも素子は、二人が歸國の準備として立ててゐた計畫を決して變へようとせず、躊躇したり見合はせたりせず、今はどつちみち自分は歸るんだから押し出したテムポで着々すすめて行つた。そのことのために、自分は益々机と本とにつながれ、朝子はやはりこれまでのとほり毎日遠方の出版所へ定期刊行物を豫約に行つたり、役所へ行つたりした。そんな場合、朝子は自分の生活にとつて其等の事務的な用件の現實性が全部遠くなつたやうな奇妙な心地と、もしかしたら素子のためにこのやうなことをしてやる最後かもしれないといふ生活の轉機を自覺した名狀しがたい心持とを、同時に經驗するのであつた。
火曜日の夕方、出がけに素子が外套を着ながら、この頃では珍しいあたり前の調子で、
「今度はどうする？」
ときいた。一週に二度づつオリガといふ女友達のところへ行つて、素子は讀んでゐる小說の俗語の云ひまはしをきいて來るのであつた。
「さあ……」
朝子も立つて來て、身仕度をするのを見ながら、
「どつちでもいいけれど、私は——」
「おいでよ。この間もオリガさんがきいてたから。なぜこの頃來ないのかつて」

「ぢや行くわ、二時間もして行くわ」

七時になると、朝子は身仕度して、城壁の傍の廣場まで歩いて、そこからバスに乘つた。市の外郭に向ふバスはその時刻にはごく空いてゐる。市街の中心を大分出はづれた大きい四辻で降りて、人通りの疎な、薄暗い往來をすこしゆくと、古風な彫物の窓枠をもつた木造の家があつて、寂しい板圍ひの塀がそれにつづいてゐる。板圍ひの木戸を入ると、楡の大木の生えた内庭があつて、オリガの住んでゐる二階へあがる木の段々が、いきなりその内庭へ向つて開いてゐるのであつた。階下に住んでゐる家具職人の窓から洩れて來るぼんやりした光をたよりに一段一段のぼつて行つて、ドアをあけ、天井の低くかぶさつた小部屋の灯の下にブラウス姿でゐる血色のいいオリガの顔を見たら、朝子は思はず、

「ああ來てよかつた！」

さう云つて、オリガの堅い力のある手を握つた。

「今更みたいに！」

オリガは笑ひながら、テーブルのむかふの素子を顧みた。

「私のところは、いつ來ても、來てよかつたところぢやありませんか、ねえ、モトコさん」

素子は何とも云はず煙草をくゆらせ、しかし朝子が現れたときの最初の一瞥でやはりその心の中まで調べずにはゐられないやうな視線を走らせたのであつた。朝子は、オリガとあれこれ世間話をした。オリガは勤人で、その小部屋には寢臺と一つの本棚と簞笥とその上に飾られた何枚かの寫眞とが、僅かの家具類と共にあるだけであつた。そんな生活の道具だてのなかに一種の居心地よさがこもつてゐて、さつぱりした住みての人柄が感じられた。

「あなた方、かへる迄にもう何度來られるかしら。一つおいしくお茶を入れて御馳走しませう」

石油コンロで湯をわかし、オリガがジャムをとりわけてゐると、その手元を見守つてゐた素子が遂に辛棒しきれなくなつた風で、

「私が歸ることは確かだけれど、朝子さんがかへるかどうかは知りませんよ」

變にしづかな聲で云つた。オリガは、

「本當に？」

びつくりした表情を素子に向け、朝子に向けた。

「モトコさん眞面目に云つてゐるの？」

「眞面目さ」

朝子は困惑した顔つきで默つてゐた。その顔をじつと見てゐて、オリガの背に皺のある大きい眼に思ひやりの柔かみが浮んだ。

「それで——もう決定したの？」

「いいえ、まだ」

誰もそれ以上は云はず、暫く皆だまり込んでしまつた。やがてオリガが、自然に話題をかへて自分の小さい甥の噂をはじめた。それからまた一轉して、今度は素子と俚諺の話がはじまつた。その話では素子が感興を面に浮べ、帳面をひろげて書きこんだりしてゐる。

朝子はこの問題がおこつて以來初めて、いいえ、まだ、と

いふ二言で素子の前にも自分の心を表明したわけなのであつたが、さう言葉に出された自分の聲を聽いてみると、一面では至極當然簡單に決定しさうなことが決定しかねてゐるといふ、心持の攙ひに愕く氣持がつよく湧いた。

話が切り出された初めから、ここに止つて作家として活動すれば最低で二百萬部は出版されるのであるしといふやうな點は、朝子の心にさう深く刻まれなかつた。朝子を感動させたのはそれよりも、ここに止つて活動し得る作家としての評價であつた。自分が作家としてそれにいくらかでもふさはしい者だといふ、その大きい駭きと歡びとの激しさであつた。その感動が餘りひどくて動顛に近い心の波をおこしたとともに、今、いいえ、まだ、と云ひつつその心持の限りでは、ここからの受諾を感じるのであつた。涙の浮ぶ混り氣なさでそれが感じられてゐる。でもなぜそれなら、いいえまだ、なのだらう。

朝子は同じ小テーブルの向ひ側にぼんやり見てゐた素子の物を書いてゐる頭のところへ、改めて我が目を据ゑ直したといふ眼瞬きかたをした。そこまで考へを追ひつめてみれば、もうそれは素子の感情などとは關係なく、この問題そのもののうちに含まれてゐる何かが、朝子に「いいえ、まだ」もうすこし深まることがあると、微かに、しかし決定的な粘りで蠢いてゐると感じられるのであつた。

オリガの家の板圍ひの塀を出ると、素子が、

「どう？　すこし歩かうか、いや？」

ときいた。それは出かけに朝子が氣付いたよりも、更に劬りの加つた調子であつた。オリガへの返事を、素子がどうとつて、どんな自身の心持のよりどころとしたのだらうか。さういふ不安と詮索が閃いたが、朝子はおとなしい口調で、

「ぢや、あの赤いお寺の横までね」

と承知した。心に新しく浮び上つて來たまだ形のはつきりしない考への重さが、ひとりでに朝子をおとなしく引き緊めてゐるのであつた。

丁度いろんな集會が終つた刻限で、店舗のないその邊の薄暗い歩道も活氣を帶びてゐた。この時間に朝子たちと同じ方向へ歩いてゐるのは僅かで、むかうの闇からぼやけた輪郭をぐんぐんと近づけて來る通行人たちが、あとからあとから擦れちがひざま、パッと街燈の光の圏に入つた刹那だけ樣々の顏立ちを夜霧と白い息の交つたなかに見せ、忽ち通りすぎてゆく。

大劇場のある城壁近くの廣場は、人波のひいた直後の深夜の寂しさが通りにみちてゐて、ゆるい勾配で上りになつてゐるそこを、ホテルの方へゆつくり歩いた。ぽつりと素子が云つた。

「作家がね、自分の國の言葉で書けなけりやしやうがないだらう？　――私はさう思ふ」

言葉といふだけの意味でなら、朝子におこつてゐる話の場合、それは云はば先づ第一に朝子として出したことであつた。日本語のわかるものがいくらもゐるんだから、そんな心配はいらない。朝子は日本語で日本のことを書けばいい、と云ふことになつてゐるのであつた。

「語學の條件としては、解決してゐるんだけれど……」
「日本語で書くわけか……日本のことを？」
「ほかに私として意味がないわけでせう」
素子は默つてゐる。
日本語で日本のことを小說に書く……ここで。——その觀念には、夜空にプラカードのはためく人通りのすくないこの歩道の上で、ここの生活を日本へ書いて送つてゐたこととおのつから違つたものとして、朝子の實感にふれて來るぼんやり居馴染めないものがあることもおほへない。二人は、一つのことをあつちの端とこつちの端とで考へてゐる表情のまま默つてホテルの階段をのぼつて行つた。

三

どんな氣持で、素子はあんなことを特に云つたのだらう。彼女が文學に對してもつてゐる理解からの誠意で云はれた言葉だつたのだらうか。それとも、時々素子が實際に當つて發揮する非常にこまかい暗默の悧巧さから投げた暗示のやうなものだらうか。
素子の顏からは何も讀みとることはできなかつた。二人はやはり用事のほかは餘り口をきかず、素子は自分の苦しさからの目立つた意地わるからは拔けて、しかし一定の距離から內へふみこまない態度でゐるのであつた。誇張の消えた事務的な調子で、素子は本を詰めて送るための木箱を催促に自分で行つたりしてゐる。
その晩二人は劇場にゐた。いつも滿員の劇場だが、今夜は或る靑年劇團の特別出演で、二階のバルコニーの段々へまで見物人がつまつてゐる。天井から平土間まで、溢れる若々しい活氣をやつと抑へてゐるやうな何とも云へないざわめきが滿ちてゐて、幕があがると舞臺の上の若さと見物席の若さとが兩方から無邪氣にかけよつて一つ世界にはまりこむやうな熱中が感じられるのであつた。だいたいが芝居と音樂好きなこの國の連中のことだとは云へ、その夜は全く特別の光景であつた。年寄連中の氣分もひとりでに釣りこまれて、陽氣に頰を火照らしながら、手のひらに持つたリンゴを時々かじりながらあちらこちら見廻してゐる。
朝子は、平土間の中頃に餘程前から心がけて買つておいた席があつた。初めちよつとした靑年生活を諷刺した笑劇で、爆笑哄笑のうちに終ると、バルコニーの席にゐる若い見物人たちが、その芝居のなかで歌はれた短い快活な唄を忽ち覺えて合唱しはじめた。こまかい節まはしのところはうまく行かなくて笑聲混りにごちやつきながら、終りの

おお
われら　若い者——
われら　若い者
といふ反覆句になると、それまではひよろひよろしながらついてゐた聲も急に目の醒めたやうな心からの力で
おお
われら　若い者
と聲を揃へて歌ひ切るのである。朝子はあらゆる感覺を開放して、その歌聲と雰圍氣とに浸り込んだ。ふりかへつてバル